

主 題：交渉の余地なし
聖書箇所：申命記 10章12-22節

今朝、私たちはごいっしょに非常に大切な聖書のみことばを学んで行きたいと考えています。

今日、私たちが生きている社会は情報過多の時代です。インフォメーションオーバーロード、そんなことばを聞かれたことがあるかもしれません。情報が溢れかえっている、私たちが好むと好まざるにかかわらず、私たちの周りには余りにも多くの情報があるわけです。テレビや新聞、雑誌やラジオの番組、町を歩いていて見たくなくても、そこには電光掲示板があつて様々なニュースが私たちの目に飛び込んできます。インターネットやまた、最近では携帯電話にニュースが表示されるようになります。私たちの身の周りの話しでなく世界中のあらゆる所からのニュースが私たちの目の前にあつという間に溢れかえるほどの量でやって来ます。皆さんが知りたいと願っていろいろがいまがそれとは関わらずに…。それらのあらゆる情報のすべてを私たちが真剣に捉えんとするなら私たちはどうなるでしょう？私たちはまともに機能することができなくなります。考えないといけないことがたくさんあるからです。私たちがやらなければならないことが一気に増えてしまうからです。それ故に、私たちはその様な情報過多の時代にあつて、自分たちの好みで自分たちの必要に沿わせて、与えられる情報を処理して行く術を学んで行きます。幼い頃、家で新聞を見る時に私が読む箇所は決まっていた。新聞社が決まっているのではなく、新聞のどのページを見るのかが決まっているのです。どの新聞社でも同じです。テレビ欄とスポーツ欄です。小さい頃の私の興味はそれだけでしたから他の部分は全部関係なかったのです。情報は溢れかえっていますが、私たちはその様にどの情報を得ようとするのかを自分で決めて、そして、それを自分の必要に添わせて処理するようになっているのです。それが故意であっても、無意識のうちにするものであつてもその様に様々な情報を処理します。なぜなら、もし、私たちがすべての情報を真剣に捉えようとするなら、私たちは機能することができないからです。私たちはそれ故に、どれ位の情報を得て、どれほどの事柄に気を止めて人生を生きて行こうとするのかを判断しているのです。

聖書は非常に大きな本です。厚くたくさんある事柄がその中に記されています。66巻の書物からなる本です。聖書の中にはたくさんの章があります。全部で1189章あります。聖書の中にはたくさんの節があります、31102節あります。これだけたくさんの章、節の中で聖書は実に30万語以上の単語を使って、創世記から黙示録に至るまで2930以上の人物に関しての話しをしています。これは人物だけです。他に書かれている様々な真理を考えるなら、余りにもたくさんの情報がこの本の中には収められているのです。それ故に、私たちはこのみことばに蓄えられているその情報量の多さに困ってしまう訳です。その結果、私たちはこの世に溢れかえっている情報と同じことをします。私たちはこのように言います。「神さまがこのみことばで表わしていることがたくさんありすぎる故に、私たちはどの様にそれを処理して良いのか分からない。それを知ること也不可能だ。それを理解することなどはもっと無理だ。」と。そして、どうするのか、自分にとって都合の良いものを選択し始めるのです。私たちはこのようないい訳をします。「神さまが求める生き方に関する情報量が余りにも多い故に、それらを全部知って、そのように正しく生きることは不可能です。」と。そして、「情報過多だ、インフォメーションオーバーロードだ。」と、神に拳を突き上げて「だから、できないのです」と言うのです。私たちに直接的に必要なことを除いて、それら以外の情報はできるだけ多く捨てて、とにかくこれだけ分かればいいでしょうと、そのように歩んでいるかもしれません。私にはこんなにたくさんの節を、単語を、真理を理解して生きて行くことはできませんと、初めからあきらめているかもしれません。もし、皆さんにそのような思いが少しでもあるとするなら、今日これから皆さんとごいっしょに学んで行くことは皆さんにとって非常に明るい知らせです。皆さんの人生は非常に単純なものであることができるのです。ほんのわずかなことに焦点を当てること、それによって私たちは神が私たちに求める生き方をしっかり全うすることができるのです。神は私たちのことを良く分かっておられる方です。だから、私たちが余りにもたくさんの情報を得ていると、それに対してこの様な反応をすることを良く分かっているのではないかと思います。それ故に、神は何をしてくださるのかということ、私たちにこれだけたくさんの単語の中から、真理の中から、私たちがどうしても理解しておかなければいけない大切なことを凝縮し

てまとめてくれるのです。今日、皆さんと見て行くこの箇所にはそれが書かれてあります。

何とすばらしい神でしょう！聖書全部を知らなくても、私たちが今日これから学んで行こうとするいくつかの事柄、全部で五つありますが、それを知っているなら、私たちは神の前に正しい、神が喜ばれる神が求めている生き方を全うして行くことができるのです。皆さん、興味ありますか？誤解のないように、もちろん、全部知った方が良いのです。でも、これから見て行こうとするいくつかの事柄を皆さんがしっかりと理解し、それに添ってしっかりと歩んで行くなれば、皆さんはここに書かれてあるあらゆる真理に正しく対応し、正しく生きて行くことができるようになるのです。五つ位ならできそうに思いませんか？2～3000と言われたら「イヤーちょっと、」と思うかもしれませんが、神はとりあえずここで五つの事柄を私たちに与えてくれるのです。確かに、聖書の中にはこの様に神の真理を凝縮した形で提供する箇所がいくつかあります。例えば、律法学者がイエスに「律法の中で一番大切な命令は何ですか？」と尋ねた時、イエスはそれを二つに凝縮して答えられました。私たちは今日その箇所に行っても構わないのですが、敢えて、今日は皆さんといっしょにそこではなく申命記10章の中から学んで行きたいと思っています。

このモーセが語ったメッソーセージの中に、私たちは私たちがどの様に生きて行くべきなのか？神が求めている最もシンプルな要求というものを見ることができます。皆さんといっしょにこの事を真剣に考え、そして、その事をしっかりと理解して行くことを通して、私が何よりも願っていることは、皆さんといっしょに神が求める要求を全うする人生を送ることができればということです。

申命記10：12-13

「イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただ、あなたの神、主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、：13 あなたのしあわせのために、私が、きょう、あなたに命じる主の命令と主のおきてとを守ることである。」

神が私たち人間に要求されていること、モーセはそれをこの2節の中で五つの事柄に凝縮しました。その五つが神が私たちに求めていることだと言います。この申命記という本は聖書の中でも非常に重要な位置を占める本の一つです。事実、この本はイエスが最も好きだった本ではないかと思えます。なぜなら、イエスが旧約聖書の引用をされる時、この申命記からの引用を一番多くされています。悪魔に試みを受けた時に、イエスは申命記のみことばを使ってその誘惑に立ち向かいました。イエスは多分この申命記を全部暗唱していたのでしょ。また、新約聖書27巻の中、17巻がこの申命記から直接引用しています。もちろん、この本はモーセによって書かれた本であり、モーセの人生の最後に彼が自分のいわば遺書として、イスラエルの人たちに自分が死んで行くその中であって、これからどの様に生きて行くべきなのかを励まし、そして、勧めた本です。ちょうど、それはパウロがテモテに対して最後のことばとして記した第2テモテのような位置にある本です。

約40年程前、イスラエルの民はエジプトから出て来ました。そして、彼らは今40年経って、ヨルダン川の向こう岸、モアブの平原に立っていたのです。出エジプトを体験した第1世代のイスラエル人たちはモーセとカレブとヨシュアを除いてもうすべて死に絶えました。そして、第2世代以降のイスラエル人たちが、今まさに神が約束によってお与えになると言われたその地に入っ行ってこうとしていたのです。その人たちに向かってモーセはこの申命記を語りました。申命記はモーセのメッソーセージ集です。そのメッソーセージの中でモーセは何をするのでしょうか？モーセは彼らに律法を伝えるのです。カデシュ・バルネアで犯した罪の故に、第1世代のイスラエル人たちはすべて死に絶えてしまい、シナイ山で律法を受けたときにその律法のことば、その条件を聞いていた人々は皆死に絶えたのです。そして、その第2世代の人たちに向かって「神があなたたちに求めていることはこれです」と言って、もう一度、神が与えた律法を繰り返す、それがこの申命記です。それ故に、旧約聖書をギリシャ語に訳した70人訳聖書では、この本のタイトルは「第2律法」という名前がつけられています。律法を2回目に繰り返して与えているその姿を現わしているからです。

私たちが今日学んで行く箇所は、モーセが語った2番目のメッソーセージの中間部分に当たります。神に対してどのように心からの忠誠を尽くして生きて行くべきなのかということをもモーセは教えていました。5章の所から律法を繰り返す、特にそこでは十戒が繰り返されていますが、そして、その神が求める律法に対してあなたがたは忠実に従って行かなければならないことを教えていたのです。そして、この箇所でモーセはたくさんある律法、それを要約するならこの五つの事柄にまとめることができるのだと人々に伝えたのです。つまり、神が求めることはたくさんありました。何百という数の細かい一つひとつの律法がありました。けれども、それらを最終的な形に、これ以上ないほどシンプルにするなら、この五つのことを挙げることもできるのだとモーセは言いました。

ここに記されてあることばは非常に単純な概念が使われています。単純な単語が使われています。けれども、そこに書かれてある表現は非常に美しく、原文ではまるで詩のような表現が使われています。響きのよい、美しいすばらしい箇所です。旧約聖書の中でも類を見ないぐらいとある注解者は言っています。これらのことばは確かに、第2世代以降のイスラエル人に向けて語られたことばです。律法の下にあり、アブラハムの契約に属するその人々に対して語られたことばです。けれども、ここでモーセが挙げているそのことばは、私たち新約時代に生きるクリスチャンにとっても、同じように神が求めていることです。なぜなら、これが神が求めることの根幹だからです。神が私たち人間に対してどの様に生きるのかという根幹がここにあるからです。そして、事実ここに書かれてある事柄はすべて、新約聖書の中に繰り返されています。つまり、これは他人事ではないのです。神が私たちにも求めている大切な要求なのです。この要求は神が人間を造られた創造の六日目から変わっていません。神は常にこれらのことを私たち人間に求め続けておられます。

いったい、どの様なことを神は私たちに求めておられるのでしょうか？そのことを考える前に、神が聞かれている、いや、モーセが人々に尋ねたこの質問自体について少し見たいと思います。モーセはこのように言います。「**イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。**」と。ここに私たちはその答えを見るために、神の要求を正しく理解し、それを実践して行くために必要な二つの鍵を見ることができます。モーセはここで非常に重要な事柄を告げています。

☆神の要求を正しく理解し実践して行くために

1. 神と個人的な関係をもたなければいけない

彼はイスラエルの民に対してこう言いました。「**今、あなたの神、主が、**」と。私たちがこの質問に正しく答えるために、この神が要求していることを正しく知るために、私たちが先ず、分かっているなければいけないことは、私たちはこの神と個人的な関係をもっていなければいけないということです。モーセは「あなた方の父祖の神が、あなた方に要求することは、これらのことです。」とは言わなかったのです。「**あなたの神、主が、あなたに求めること…**」と、あなたの先祖の神ではなかったのです。バプテスマのヨハネのもとにパリサイ人や律法学者たちがやって来て、バプテスマを受けようとしていました。その時、バプテスマのヨハネは彼らの対してこの様に言いました。ヨハネ3：9「『われわれの先祖はアブラハムだ。』と心の中で言うような考えではいけません。あなたがたに言うておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。」、イエスが生きていたその当時のイスラエル人たちは、自分たちは神との関係をもっていると考えていたのです。どうしてそのように考えたのか、それはここにあるように「**われわれの先祖はアブラハムだ。**」と言っていることです。けれども、バプテスマのヨハネが彼らに求めたことは、あなたは本当に悔い改めていますか？あなたは本当に神との関係をもち、それを正しいものにしようとしていますか？ということです。問題は、私たちが教会に来ているからとか、私の両親がクリスチャンだったからとか、私はそういう影響のもとで生きてきたからとか、そのようなことではないのです。モーセが人々に求めたのは「あなたの神、主が、求めていることは何か知っていますか？」です。私たちはそのことをよく覚えておかなければいけません。なぜなら、神が求めていることを正しく理解しようとするなら、私たちは誰かの信仰に頼ってそれを理解することはできないのです。個人的な神との関係ということ、私たち自身が「神よ、あなたは私の神です」と言うことができる関係の中に入っていないければ、これらのことを知ることも理解することも実践することもできません。

2. 私たちの人生には交渉することができないものがある

もう一つの鍵となること、それは「私たちの人生には交渉することができないものがある」ということです。「**あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。**」と、ここで使われている「**求める**」ということばは「要求する、必須なものとしてそれをしなければならぬという責任の下にそのことを尋ねる」という意味があります。特に、神が主語としてこのことばを使われる時、これはだれ一人として「いや、でもこれはどうでしょうか？」と言って交渉できる要求ではないのです。私たちの人生にはこの様に交渉できない事柄が多々あります。神が私たちに求めることだから。これらはそのような類のものであるというのです。つまり、私たちがよくすることですが、「神さま、私はこれはするけれども、あれはできませんから、すみませんがこれだけ見ていてください。」と一生懸命交渉して「こういう状況の中だから神さま、どうぞ今これができないことは許してください。」と願うのです。けれども、ここで神が言われていることは、一切、そのような交渉をする余地のない絶対的な要求であるということです。もし、私たちがそのことを正しく理解することがなければ、私たちは神の前にこれを成し遂げて行くことはできません。もし、私たちがここで言われ

ていることをしっかり知って、それが交渉の余地のない、間違いなく神の前に私たちがしなければならぬこととして命じられていることを理解しなければ、どこかで妥協します。でも、モーセは言うのです。「あなたの神、主が、あなたに絶対的に要求として求めていることは何ですか？あなたはそれを知っていますか？それ故にあなたはそれをしようとしていますか？」と。

ちなみに皆さん、人生にはいろいろな質問、疑問があるかもしれません。でも、それに対する答え、ここで言われている質問以外のあらゆる答えを正しく答えたとしても、「神が求めていることは何か？」というその回答に失敗するなら、他のどんな部分で正解を言えたとしてもそれは意味がないことです。なぜなら、神の求めていることを見逃しているならどうしようもないではありませんか！神が求めていることをしっかり理解することは、皆さんの人生にとって他の何よりも最も大切なことであり、それ故に、この質問をモーセはイスラエルの人々に投げかけるのです。「あなたは今から約束の地に入っていきます。あなたはその約束を受ける者として、あなたの神があなたにどのようなことを要求しているのかをしっかりと理解していますか？」と。私たちはクリスチャンとしての人生を生きて行くに当たって、神が私たちに要求している事柄が何であるかを知ることは、私たちににとって最も大切なことの一つです。

では、いったい、神は何を要求しているのでしょうか？神が求めていることとは何でしょうか？神があなたがたがしなければならぬ、やって当然であると言って私たちに要求する命令とは何なのでしょう？聖書の中にある多くの律法、新約聖書の中に見つけることができるたくさんの命令、それらすべてを凝縮したときに出て来るものとはいったい何でしょうか？五つのことがそこに挙げられていると言いました。皆さんもお気づきのとおり12-13節に記されているのは「恐れること」「歩むこと」「愛すること」「仕えること」そして、「守ること」です。ある注解者はこのように言いました。「これら五つのことばは、それぞれが一つ一つのすばらしい響きを持っている音のようなものである。これら五つの音が組み合わされるときに、それは他に見ることができないようなすばらしい和音を奏でて、私たちに神が求めることが何であるかをはっきりと示してくれる。」と。

☆神が私たちに求めること

1. 神を恐れること

和音の一番目、神が私たちに求めるその一つ目は「私たちが神を恐れること」です。この「恐れる」ということばは「恐怖を抱く」と訳すことができます。けれども、特に、神との関係を表わすときにこのことばは「畏怖の念を抱く」、その神の偉大さを知る故に神の前に「崇拜の心をもつ」と、そのような意味で捉えることができます。ここでもそれは例外ではありません。皆さんお気づきですか？「恐れ」はどこに現われるものですか？私たちの外面ではありません。私たちの内面にもつものです。神が私たちに何を要求されるのか、モーセが一番最初に挙げるのは私たちが外的にどうであるというのではなくて、私たちが内面的にどのような態度をもって神の前に出ているのかです。それが「恐れ」と言うのです。忘れないでください。このことばは確かに畏怖の念を抱くという意味をもち、神の前に崇拜の心をもつのですが、同時に、それは「震え上がる」ような恐ろしさを知っていることも表わすのです。私たちの心はこの「恐れ」をもっていなければいけないのです。この「恐れ」をもっていることによって私たちは神が求めることをしっかり生きて行くことができるのです。それが神が求めていることだからです。

ソロモンはこのように言いました。箴言4：23「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。」、力の限り私たちの心を見張るのです。ここから私たちのいのちの泉が湧き出るからです。私たちの心が何によって満たされているのかは非常に重要なことです。イエスはマルコ7：20-23でこのように言われました。「また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。：21 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、：22 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、：23 これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」、皆さん、知っていましたか？私たち人間の心は汚れているのです。私たち人間の心は悪に満ちていて、そこには何一つ良いものはなかったのです。それ故に、神が私たちに對して恐れをしっかりともっていなさいと言われるのは、当然のことと思いませんか？もし、私たちの心がこの神に対する恐れに支配されていなかったなら、私たちの内側から出て来るものは、イエスが言われた通りのことです。それ故に、私たちが行なって行くあらゆることは、神の前に喜ばれるものではなくって行きます。けれども、もし、私たちがこの恐れを内側にしっかりと蓄えて置かなら、その恐れが私たちに支配しているとすれば、聖書が「主を恐れることは、知恵の初め。これを行なう人はみな、良い明察を得る。主の誉れは永遠に堅く立つ。」（詩篇111：10）、「主を恐

れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」（箴言1：7）と教えている通りです。それ故にモーセは、神が何を求めておられるかというときに、一番初めにこの「恐れ」を挙げているのです。けれども、皆さん、神を恐れるとは具体的にどういうことでしょうか？ここで使われているそのことばは、先程言った通り、神に対する畏敬の念、畏怖の念を抱くことです。

ある牧師はこのことをこのように説明しています。「これは神のみこころに従うという、その行為によって現わされる神に対する畏敬の念である。つまり、神ご自身を真剣に捉えることだ。この神に対する畏怖の念というのは、神の言うべき真意を正しく認識し、私たちの人生を完全に支配されている王であることをしっかりと認めることから始まる。それ故に、神が何よりも最もすばらしい、最も偉大な方であるということをも認めることである」と。人が神のもっている力、知恵、主権、その聖さを正しく認識した時に、その人にできることは一つしかありません。それは神の御前にへりくだることだけです。皆さんは神の前に立つその姿を想像することができますか？偉大な力をもっておられ、あらゆる測り知れない知恵をもっておられ、完全な主権者であり、圧倒的な聖さをもつその方の前に立つとするなら、皆さん、ひざまずいて、恐れおののいてひれ伏すこと以外に何かできますか？神はそれを求めているのです。そのような恐れを抱く故に、そこには従順があり、礼拝があり、依存があります。

イスラエルはこのように主を恐れました。神がシナイ山でイスラエルの民の前に現われた時に…。もう少し時間があればもっと詳しく見たいのですが、申命記5章でモーセはそのことを私たちに教えてくれています。もちろん、この姿は出エジプト19－20章で見ることができます。申命記5章で、モーセは十戒が与えられたそのときの事柄を人々に説明しています。神はシナイ山を聖別し、そして、そのシナイ山の麓にイスラエルの人々を集めました。そして、神はシナイ山に下られて人々に対して語られたのです。5：22にこのようなことばが記されています。「**これらのことばを、主はあの山で、火と雲と暗やみの中から、あなたがたの全集会に、大きな声で告げられた。**」と、ぜひ、想像してみてください。山の上には「**火と雲と暗やみ**」が満ちていた、恐ろしい光景です。そして、私たちはその麓にいます。神の声が私たちに聞こえて来るのです。十戒を告げるその声が…。イスラエルの人々はその神の声を聞きました。そして、彼らは非常に恐れたのです。これが神が人々にもって欲しいと願っている姿なのです。人々は神を見ることを恐れた故に、その後何を願ったのか？モーセよ、どうぞ、神が二度とあのように私たちに話すことがないように、あなたが山に行って神と話してください、私たちは神の言うことを何でも聞きますから、どうぞ、神が私たちに話すことがないようにしてください」と恐ろしかったからです。その人々の姿を見て神は何と言われたのでしょうか？29節にこのように記されています。「**どうか、彼らの心がこのようであって、いつまでも、わたしを恐れ、わたしのすべての命令を守るように。そうして、彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように。**」、神は何を喜んでおられましたか？人々が神の偉大さを知って、それに対して恐ろしさを覚えたことに対して、神はそれがいつまでも続くようにと言われたのです。そのようにしてシナイ山でイスラエルの人々は神の偉大さを知り、神を恐れることをその時は学びました。その結果、彼らは神の前にへりくだり、神の前に立って何と言ったのでしょうか？27節「**あなたが近づいて行き、私たちの神、主が仰せになることをみな聞き、私たちの神、主があなたにお告げになることをみな、私たちに告げてくださいますように。私たちは聞いて、行ないます。**」、神が語られたなら「私たちはあなたのことばを聞きます、神さま」、そして、聞くだけではない、「私たちはそれを行います」、なぜなら、神がだれなのかを彼らはその時点ではっきりと見たからです。ちなみに皆さん、このような経験をしたのはシナイ山におけるイスラエルの人たちだけではありませんでした。

ヨブはどうだったのでしょうか？ヨブ記の終わり38－42章を見ると、神がヨブの目の前に現われ、そして、ヨブに対して質問をします。「あなたはいましたか？わたしが創造した時に、あなたはあらゆることをわたしのようになすことができますか？」と、神ご自身のすばらしさをヨブに問いかけます。そして、神がどの様に偉大な方なのかということが圧倒的な形でヨブに知らされたときに、唯一ヨブができたことは、灰をかぶって神の前にへりくだって悔い改めることだけでした。「神さま、わたしが間違っていました。」と。イザヤはどうでしょう？イザヤ書6章でイザヤは天に上げられ、そこで彼は神の圧倒的な聖さを見たのです。「**聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。**」（イザヤ6：3）と天使たちが叫ぶその声を聞き、神の栄光に満ちた御座を彼が見たときに彼ができた唯一のことは、その場に倒れて「何と私は汚れた者か」と言うことだけでした。その反応は同じではありませんか？エゼキエルはどうでしょう？エゼキエル1章ではエゼキエルも同じように天に上げられて主の御座を見ました。そして、そこに座っておられる方を見たとき

に、彼が唯一したことは即座にその場にひざまずきこの方を崇めることでした。それしかできませんでした。ルカの福音書5章で、イエスがペテロをお呼びになります。召されるのです。何が起こったのか？一晩中、ガリラヤ湖で漁をしましたが、魚は一匹も網にかからなかったのです。疲れ果てて陸に帰って来るとイエスがそこにいて「あちら側に網を投げてごらん」と言うわけです。そんなことは無駄だと思いつつペテロたちは出て行くのですが、網を投げ入れた瞬間からものすごい量の魚がそこに入ってきて、網を引き上げることもできなかったのです。ペテロは大あわてで岸に帰って来て何と言ったでしょう？ルカ5：8「**これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言った。**」。イエスがご自身の偉大な力をペテロの前に示したとき、ペテロはイエスがだれなのかを理解したのです。そして、彼が唯一できることは、へりくだって主の前にひざまずくことだけだったのです。例を挙げればきりがありません。サウロはどうでしたか？後にパウロと改名したタルソのサウロ、ダマスコへの途上、イエスが光の中に現われました。使徒9：4「**彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。**」、9：5「**彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」**」、サウロは「**主よ。**」と尋ねます。いったい私は何をしたらよいのでしょうか？主よ、と。この方がイエス・キリストであると分かったその直後です。それまで迫害していたそのキリストに属する人たちをまとめていたイエス・キリストです。それが光の中から、彼よりも偉大なものとして語られたその姿を彼が知ったときに、彼が唯一したことは「主よ。私は何をしたらよいのでしょうか？」と言うことでした。使徒ヨハネはどうでしょう。イエスが最も愛された弟子、最後の晩餐でイエスの胸元に寄りかかることができたそのような弟子ヨハネ。彼がパトモス島で、主の日に幻の中で天に上げられたそのとき、彼はイエスの姿を見ました。恐ろしい姿が黙示録1章のところに記されています。そのイエスの神としての姿を見たヨハネが唯一できたことは、見た瞬間、彼は恐ろしさの余りその場に倒れて死者のようになったのです。神の姿を正しく理解した人物は神に対す恐れがあるのです。

神が求めること、それは皆さんが「神さま、私はあなたを愛しています」と言うことだけではないのです。もちろん、それも必要です、この後、そのことも出て来ます。けれども、一番最初に何が挙げられているのかよく考えてください。低音で美しい和音を支えるベースになっているその音は「主に対する恐れ」なのです。皆さん、神を恐れていますか？皆さんは主の前に立つことを恐れていますか？この方がどれくらい偉大な方なのかよく分かっていますか？その方の前に私はひざまずくことしかできない、罪を悔い改めて、その方の前にただただ灰をかぶって悔い改めを告白することしかできないと、そのような神ですか？神がいったいどのようなお方であるのかということを私たちが正しく理解するなら、そこには必ず神に対する聖い恐れが生まれて来ます。それがなければ、もしかすると、神のこと自体を知らないのかもしれないかもしれません。神を見て、神を知って、神に対する恐れを抱かない人はだれ一人いません。もし、今この瞬間、神がこの場に現われたとするなら、私たちが唯一できることはこの場にひれ伏すことだけです。握手を求めになど行かないのです。「神さま、来てくださってありがとう」と言って抱きかかえに行かないのです。なぜなら、私たちが信じるこの神は偉大な王だからです。そこには権威があり、力があり、何よりも完全な聖さがあるのです。

もしかすると皆さんは、このような「恐れ」というのは旧約聖書だけのことだと思われるかもしれませんが、それは余りにも大きな間違いです。なぜなら、私たちは新約聖書の中にも同じことを見ることができるからです。ペテロはIペテロ1：17でこのように言います。「**また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさい。**」、これはペテロが「**わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。**」という、レビ記のみことばを引用した直後に言っていることばです。「**地上にしばらくとどまっている間の時**」、今生きているこの人生のとき、私たちは何をするのでしょうか？ペテロは「**恐れかしこんで**」生きなさい、そのように過ごしなさいと言うのです。神は不公平な方ではありません。公平にさばかれる完全に聖い方である故に、神は私たちに同じ基準をもって接してくださるのです。どのような基準ですか？神が聖いようにあなたも聖くありなさいという基準です。その基準を見たとき、それはどのようにしてできるでしょう？「大丈夫、できます」と言えますか？それとも「神さま、どうすればそれができるのでしょうか、助けてください。あなたの前に立たなければならない日がやって来るから私が聖さを保つことができるように、主よ、私をあわれんでください」と恐れかしこんで生きようと思しますか？パウロはIIコリント7：1でこのように言います。

「愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。」と、これは私たちクリスチャンに対するパウロの勧めです。患難時代に天においてイエスが地上再臨される直前に、天にいる信徒たち（私たちのことですが）を聖書はこのように呼んでいます。黙示録19：5「また、御座から声が出て言った。「すべての、神のしもべたち。小さい者も大きい者も、神を恐れかしこむ者たちよ。われらの神を賛美せよ。」と、簡単なことばかもしれませんがよく覚えておいてください。もし、皆さんが今日、神を恐れかしこむ者でないとするなら、皆さんはこのときに天にいません。なぜなら、天にすることができる者たちは、小さい者も大きい者も皆すべて、神を正しく恐れかしこむ者だからです。皆さん、恐れかしこんでいますか？神の前に畏怖の念を抱いていますか？

神は私たちに恐れをもつようと命じています。要求しています。交渉することができないことです。私たちが確かに、神との個人的な関係をもっているとするなら、私たちは神を恐れる者へと変わったのです。私たちが罪を犯すその一番の理由は、私たちが神を正しく知らない故に、神を正しく恐れていないからです。皆さんは「神さまは全知だ」と言います。では、どうしてだれも知らないからといって心の中で罪を犯して平気でいられるのですか？「神さまは遍在だ、どこにでもおられる、神の存在しないところはない」と言いますが、どうして一人でいるときに皆さんは罪を犯すのですか？神は圧倒的に聖い方で汚れをいっさいもたない、汚れのある者は神と交わることができないと知りながら、どうして自分が罪を犯しているのにその罪を正しく清算することをせずに平気でいられるのですか？どうして、その罪の中を歩み続けることができますか？神を知らない故に正しい恐れを抱いていないのです。恐れているなら、私たちが一人でいる時に何か悪を企もうとしても、悪をしようと思っても、そこに神がおられることを知っている故に、その神が私たちを正しくさばくことを知っている故に、その悪の行為は止まるはずで

す。シナイ山の麓にいたイスラエルの人たちと同じように私たちも言います。神を恐れること、私は聞きます、そして行ないますと。今朝、私たちが自らに問いかけなければいけない質問、それは、私は神を恐れているかどうかです。皆さんは神のすばらしい栄光を十分にご存じでしょうか？その偉大な力がみことばを通して示されているその真理に目を傾けていますか？その様に偉大な方であるということを聖書を通してしっかり理解する故に、皆さんはこの方の前にへりくだっていますか？正しい恐れを抱いて生きようとしていますか？それともこの神は皆さんにとって皆さんの周りにいる他の人たちと余り変わらない人物ですか？別に少しぐらい失礼があっても構わないと思っていませんか？神は愛の方だから多少は見逃してくれるなどと思っていませんか？もしかすると、現代のキリスト教会に最も欠けているもの、それは「神への恐れ」かもしれません。願わくは、それが皆さんにとって最も欠けているものでないように。

神に対する恐れを抱いてください。神はすばらしい愛のある方です。誤解しないでください。でも、その愛のある方は圧倒的な聖さをもって私たちに迫っている方です。この方は恐ろしい方です。皆さんはこの方に対して正しく理解し、この方に対する恐れをもって生きて行く責任があるのです。なぜなら、神が言われました。モーセも言いました。「あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。」「それは、ただ、あなたの神、主を恐れ、…」と、主を恐れることです。神に恐れを抱いて生きて行きましょう。